パドゥルズ　**2000**
ミュンスター・ケルン（ドイツ）滞在記

滞在期間：**2000** 年 **9** 月 **4** 日－**10** 月 **2** 日
ミュンスター：**cuba-cultur, 9** 月 **4** 日－**16** 日
ケルン：**Moltkerei Werkstatt, 9** 月 **16** 日－**10** 月 **2** 日

アーティスト：伊藤洋介

１．ミュンスター

９月４日出発

わたしにとっては、パドルズのオーガナイズとアーティストとしての制作の両立をどうするかというところが、目下のテーマなのだが、さすがに年後半のプログラムが佳境に入っている時期に、自らの渡欧レジデンスが重なるというのはキツかった。不在中コーディネーター箭内氏を始め、諸氏に迷惑をかけると思うと…どうなるのかと思いつつ、気がついたらミュンスターに着いていたという感じだった。こんなに飛行時間が短く感じた(ほとんど機内で寝ていた)ことは過去にない。この時間が続いてくれればとさえ思った。(どこにも属さぬ時間…逃避か…)デュッセルドルフではエーハード（cuba ディレクター）が迎えに来てくれていて、再会(昨年 cuba を訪れた際会っている)を喜ぶ。ミュンスターに着き cuba のスペースを確認のち、エーハード宅へ。(泊めてもらうのだ。)この際Ｅメールの通信状況を試すが、ドイツの０発信というのが曲者で、どうにもモデムが反応しない。この先１月メール不能かと、重い気持ちで寝床に入る。

９月５日

機内で良く寝たためか、時差がない。エーハードとキッチンで朝食。知らなかったのだが、ドイツ人は伝統的には、昼食がメインだそうで、朝夜はあっさりしているとのこと。実際、４日の夜もパンとスープで済ます。(日本人の小さな胃にはちょうどいいのだが。)エーハード宅は広い。リビング、キッチンを入れて６部屋。今日から制作に取りかかる。３種類のインスタレーション。いまさらながら、４日間の準備期間で、なんでこんな強行軍をしようとしたのか、魔がさしたとしか言いようがない。ひとつは、６月にＮＹで行った個展のものをアレンジしたもの。２つ目は、cuba のエントランスの壁。ウインドウに面しているので、その「窓」を模し、壁面にフォト・インスタレーションを展開予定。３つ目は、Ｆａｘプロジェクト。今回共通モチーフとして、フェンスを想定した。フェンスにはさまざまな含意をこめているのだが、世界各地の知人に呼びかけ、フェンスの写真をＦａｘで送ってもらい、だらだらと延びているペーパーロールに折りを加え、Ｆａｘマシン共々インスタレーションにするものだ。地元の作家にも協力を仰ぐ。すでにいくつか届いていた…感謝。cuba で再びメールを試す。難なく成功、ほっとする。

９月６日

広報担当のステファンに自転車を借りることになり、朝彼の家へ。彼は長身なので、そのままでは地面に足が着かぬどころか、ペダルをちゃんと回せない。サドルを下げようとするのだが、錆びてて下がらず。子供が大人の自転車に乗るようにして、cuba に向かう。かなりカッコ悪い。ミュンスターは自転車率が高い。環状の自転車専用レーンがあり、ここは気持ちがいい。到着後、制作開始。まず別室のインスタレーションを決める。その後、ウィンドウスペースの壁面を…。そうしている間、エーハードから電話が入る。(彼は本日休み。ドイツ人は週３０時間しか働いてはいけない様。)フィル・ニブロックから電話があり、移動途中で cuba に寄るとのこと。まさか彼が来るとは…６時過ぎ、フィル到着。この１２月にエーハードもフィルのＮＹのスペース（EI, NY）に行くらしい。フィルはベルリンでのフェスティバルなど公演続きで、ヨーロッパ中、愛車ＢＭＷを駆って移動している。相変わらず忙しい人だ。フィルもパドルズで、この１０月に東京、青森に来るのだが、スケジュールが密で少々混乱しているらしい。cuba では途中の作品を見てもらい、カフェで２時間ほ

ど話した後、ブリュッセルで会おうと言い残し(９日に、ブリュッセルでＥＩ主催の展覧会／コンサートがあり、これにわたしも誘われた。)去っていった。わざわざ寄ってもらって感謝。

９月７日

Ｆａｘプロジェクトで新たな問題が。ウィンドウスペースは公共スペースなので、もし、Ｆａｘマシンをそこに設置する場合、盗難の危険がありとのこと。手の届かぬ上部に設置し、ボルトで固定することに。cuba のハウスキーパー、ガートにいろいろ作り物をしてもらう。ロールのほうもだいぶたまり、何とかインスタレーションになりそうな量になってきた。cuba は、市の文化センターの地下室をエーハードが使い出したのが始まりとのこと。エーハード自身は、インプロビゼーション(即興演奏)のギタリスト。当初は、サウンド関係の交換コンサートの企画から始めたとのこと。現在前出のステファンとアンドレアというアシスタントを使って cuba を運営している。市から助成を受けているが、アシスタントとしては失業者を使わなければいけないらしく、仕事を覚えたころにやめていくことになり、たいへんだとのこと。安定した援助の見返りとしてこのような義務も負うらしい。実験的なスペースとはいえ、社会にしっかり組み込まれている感じが強い。広報のステファンは、明日のオープニングの際、わたしの作品を来客に説明しなければならないとのこと。昼過ぎからインタビューを受ける。二人とも英語が同等レベルなので、なかなか意思の疎通が難しい。片や、英独辞典、片や英和辞典を引き引きという変なインタビューに。２時間ほどかかる。その後エーハードと街の中心部を通り歩いて帰る。やっとなんとなく地理がつかめてきた。夜は彼のサウンド作品(インプロビゼーションなので全部ライブ録音)を聴かせてもらう。独学だそうだ。

９月８日

Ｆａｘロールを、フォト・インスタレーションの対面の壁にインストールする。当初は、床面で考えていたが、建物のエントランスで風が強く断念。壁から突起を出し、フェンスにロールが巻きつくかのようにセッティングする。夕方、ケーブル等の配線が終わり、何とか間に合う。配線の際には、前出のガートに全面的にお世話になる。オープニングの前に、当初今日は来れないと言っていた、エファ・コリッシャンが来てくれる。彼女は、パドルズ青森展参加アーティストで、ミュンスター在住。今回のＦＡＸプロジェクトでも写真を提供してもらった。彼女も紙を作品に使うよう。作品には共感してくれていた。また東京、青森で会いましょうと言い握手。さてオープニング。ステファンは、スピーチをしなければいけないので、ナーバスになっているとのこと、でっかい身体でそわそわ歩き回る。常連の人々でささやかなオープニング。以前 cuba で展覧会をしたクボタ氏も、デュッセルドルフから来てくれる。地方新聞関係が３社ほど来る。こちらの新聞は地方紙が充実しており、それぞれに毎日美術欄がある。また１時間ほどインタビュー。昨日ステファンから受けていたので何とか話せた。こちらでは当然なのだろうが、作品の意味に対する興味や関心が強く、質問もその点に集中する。答えはかなりこじつけだが、相手は納得していたようだ。作品の中に座り、笑顔で写真をというのにはちょっと閉口。終盤、今度大阪ＣＡＳに来るルッペ・コセレックが慌てて現れる。その後、トルコ・レストラン(去年も行った)で食事。ルッペは歴史好きらしい。ヨーロッパが初めて日本の存在に気づいたのは、日露戦争だと力説する。その後 11 時過ぎ解散。

９月９日

今日は、パドルズ参加アーティスト、マリア・ブロンディールら、ＥＩ(パドルズ参加組織)主催の、

ベルギー、ブリュッセルでの展覧会・コンサートのオープニングに出かける。朝、エーハードが、インターネットで、最新の時刻表を出してくれる。(エーハードには本当にお世話になっている。)マリアから誘われた際、軽い気持ちで行くといってしまったが、良く考えると結構遠い。ケルンからならまだしも、ミュンスターからだと…。昼過ぎ、インターシティーでミュンスターを発つ。ケルンで乗換えなのだが、この電車、なぜか途中で速度を落とし、結局乗り換え電車に乗れず。ケルンで時刻表を見ると、次の電車で行った場合、到着が６時を回ってしまい、オープニングに間に合わない。やれやれ。今日泊めてもらう予定のヨシ＋ルシアさんに電話、状況を話す。マリアにも電話したがつかまらず。その後どうにかブリュッセルに着く。何と６時間もかかってしまった。フィルのコンサートが８時からなので、こちらのみに。会場のＢＡＲ　２０００でフィル、マリアに再会。ここは、広い空きビルを一時的にバーにしたもの。広い吹き抜けがあり、そこに大スピーカーが上向きに設置してある。例のフィルのサウンドが、吹き抜けで反響し大音響となる。やはり彼のサウンドはこのような場所に合うのだなとあらためて思う。隣では、インターネットで４都市を繋ぐイベントが。マリアはこちらのオーガナイズで忙しそうだ。１２時過ぎ終了後フィルと、東京で使用する機材について少し話し、日本でまた、と言い別れる。彼はこの後車で、深夜ドイツ・デュッセルドルフにもどり、明朝ニューヨークに発つと言う。信じられない…。

９月１０日

朝、マリアから電話があり、"See you in Japan." と。これは合言葉になっている。泊めてもらったヨシ＋ルシアさんと、昼マリアの展覧会に出かける。ＣＣＮＯＡ(ギャラリー)のオーナーはニューヨーカー。ブリュッセルはコスモポリタン、だいたい４カ国語は皆普通に話せると言う。さまざまな国の人間が集まってくるようで、洗練された印象がある。その後またミュンスターに戻る。昨日今日は、ほとんど移動日だ。ミュンスター到着後、cuba に寄ると、フェンスのＦａｘがまた増えており、アレンジしなおす。その後エーハードとドーテさん(同居人)とレストランに。伝統的なドイツ料理、シュニッツェル(カツレツ)を試す。おいしかった。さすがに移動疲れで早く寝る。

９月１１日

とりあえず今日から１６日のケルン移動まではフリー。昨日の疲れもあり、朝ボーッとしていると、エーハードが起こしに来る。新聞に笑顔の日本人アーティストが載っているよと言う。金曜オープニング時の取材記事が、月曜朝刊に載っている。朝食を取りながら、エーハードが英訳してくれる。タイトル"Thin Gaze" を、「短い強い眼差し」と間違えて解釈しているぞ、と教えてくれる。うーん。この新聞記者は、他紙の記者の質問を聞いてわたしの答えを書いているだけだった気がする、まあいいか。今日はやっと写真が撮れそうだ。今までまったく写真を撮る機会がなかったので、エーハード宅から cuba まで、ぶらぶら歩きながら写真を撮る。cuba で作品写真もテスト。自然光とタングステンが混ざるので、どうなるのか…。エーハードにカタログ用記録写真を撮っておいてほしいと頼んだが、お金がないらしく、知り合いを当たると言う。カタログ費用に関しても、これからお金を作らないと無いと言う。まあ金策はどこもたいへんだ。昼過ぎ、ステファンが別の掲載紙を買ってきてくれる。cuba 展は２紙に掲載されたが、他の記事も見比べると、トピックがほとんど一緒だ。やはり小都市で、話題に事欠いているのだろうか…失礼。そういえば、７月にパドルズで東京・秋山画廊に来たピョトル・サモイスキーが、新聞記者は来ないのかと、聞いていたというのを思い出した。国際交換展で新聞が来るのは当然と、思っていたのだろう。新聞に対する感覚の違いがあ

る。夜、ウインドウ・スペースの撮影を試みる。やはり外から撮りたいのだが、９月とはいえ、夜８時でもまだ明るい。結局今日はテストせず。カメラを持って街をふらふら。１時間ほどで１周してしまう、小さな街。

９月１２日

今回、事前にミュンスターの情報を集める時間がなかったので、インフォメーションで、ツーリストガイドを購入。残念ながら、日本語のものは無し、英語版を。ガイドによると、ミュンスターの地名の由来は、修道院（monastery）から来ているよう。前出の、街を取り囲む自転車専用レーンも、中世、街が２枚の壁に囲まれていたものの名残。紅葉し始めた巨大なリンデンの木がトンネルをつくる。美しい。先週ヤンス・ブランド(パドルズ・ドイツ側ディレクター、自身のパフォーマンスツアーで不在中)と電話で話した際、ミュンスターは退屈じゃない？と聞かれたが、大都市の喧騒から程遠いこの雰囲気には、正直言ってほっとさせられる。こういう時間がないと人間参ってしまうのか…。昨日に引き続き、街を散策する。エーハード(エァハートのほうが正確な発音に近い、今後修正)に主要なギャラリーの場所を教えてもらう。しかしギャラリーも、書いてある時間どおりに開いておらず。のんびりしている。あまり人が来ているようにも見えない。(私の展覧会もだが…。)午後、出した写真が上がってくる。それを見ながら作品写真を多少撮りなおす。夜９時ごろ、外からウィンドウスペースの写真をテスト。この後９時半頃帰るが、すでに大半の店は閉っている。そもそもコンビニのようなものはこの街にはなく、すべてのことは昼に済ませなければいけない。なんでも、条例で開店時間が決まっているとのこと。近々この条例が改正されるらしい。

９月１３日

昨日ガートに、ステファンの自転車のサドルを調整してもらった。彼、ハンマーでサドル支柱を叩くという荒技に出る。後でそれを発見したステファンが、少し悲しそうな顔をしていたが…。これでやっと普通に自転車が乗れる。前も書いたが、とにかくこの街は自転車が多い。自転車専用の信号もある。日本で言えばバイクと同じような扱いで、例えば左折の際には(注：日本と逆走行)車道の中央に出て信号を待つ。やはり慣れないので少し怖い。中心街はすべて石畳。路面に気を取られて、つい目的地を行きすぎたりする。まだドームを中心とした、中世円形都市の地理感をつかんでいないということもあるが。東西南北というよりも、尖塔を見て位置把握をするほうが正確だ。「月はどっちに出ている」ではないが…。これだけ空間把握の仕方が違えば、当然思考法も変るだろう。ガイド本のスポットを示す番号も、ドームが１番で、螺旋状に外に向かって番号が振ってある。よく言う、「中心」と「周辺」が明快な都市。今後のスケジュール上、３、４日フリーとはいえ、ケルンの展覧会で使用するスライドの内容を考えなければいけない。ケルンでは、紙の立体をスクリーンに見立て、こちらの風景を投射予定。昼間はネタ探しにうろうろする。線路付近で何ヶ所かテスト撮影。ここは旧市街リンクの外、「周辺」の風景…。何処も変らぬ共通感覚があるように思う。なぜか知らぬ間に辺境に足が向かってしまう…。夜、ウーヴェ（パドルズ次年度ドイツ側推薦ペインター、招聘検討中）に電話し、明日スタジオを見せてもらうため、時間等相談。夕方 cuba に来てもらうことに。

９月１４日

昨日夜、パドルズ次年度招聘作家として急浮上してきた、ハラルド・ブッシュのビデオを、エァハ

ートに見せてもらう。すると偶然にも、先日ブリュッセルのニブロック・コンサート＋インターネット・イベントの際、上映されていたものではないか。その際はただ面白い作品だと思って見ていただけだったのだが。慌ててブリュッセルのフライヤーを確認すると、確かにHarald Buschの名があった。エァハートも、彼がこのイベントに参加していたことは知らなかったようで、何とも世界は狭い。今日も街に出る。美術館をしらみつぶしに、という気にはなれないので、本屋に入ったり、デパートらしき店内に入ったりして、どんなものがあるか覗う。最初は気がつかなかったが、いくつかインターネット・カフェのようなものもあるし、シティバンクもある。旅行者も、情報収集や現金引出しで困ることはないだろう。午後、有名な野外彫刻展"Skulptur"の主なサイトであった、人口湖を自転車で回る。"Skulptur '77"オルデンバーグの作品がまず目に入るが、落書きだらけ。パブリック・アート、落書板の機能を果たす…。夕方ウーヴェとcubaで待ち合わせ、エァハートと共に彼のスタジオに。場所はかなり街外れ。ギャラリースペースが２つあり、きれいな空間だった。ひとつは、若いディレクターの個人ギャラリー。もうひとつは、ウーヴェら、アーティスト共同運営のギャラリースペース。市街から離れているので、オープニングは常に同時に行うよう。ウーヴェのスタジオ兼住居も見る。もしパドルズに参加するとしたら、どんなかたちが可能か少し話す。彼は日本庭園に興味があるようだ。

９月１５日

昨夜はエァハートと、パドルズやcubaについて、また、アーティストとオーガナイザーの両立について話す。ドイツの状況、ニューヨークとの比較、日本の外来からの影響、また、アーティストの立場、態度の比較に話が展開したが、基本的には、問題やテーマは共通のものがあるように思う。ヨーロッパが約束された場所という訳ではないようだ。エァハートは、７０年代末から８０年代初頭のムーヴメントに対する思い入れが強い。常にコンサバティヴと距離を置きたいと。今回パドルズ参加にあたって、わたしの書いたコンセプトを読んだ際、自分がその時期活動を開始した感覚に近いと思ったという。ｃuba は緑の党と足並みをそろえてきたというが、政権交代でオルタナティヴがマジョリティーになった今、新たな問題を抱えているようだ…オルタナティヴとは何か？エァハートにとっては、オーガナイザーとしての仕事は、彼のビジネスで生活の糧だ。しかしビジネスゆえに、自由にならぬところもあるようだ。エァハート、あまり酒を飲まぬ人と思っていたのだが、昨夜は２人とも飲んだ。彼は早口になりドイツ語が混ざる。現実のシビアな話になると…。たしかにドイツは、コンテンポラリーアートを売買するシステムは整っているだろうし、作品を見る人間のリアクションは、的を得ていることが多いだろう。だが、アーティストとして何をすべきか…現状や歴史を疑い、何かしらの批評的態度を、現実にかたちにしてゆくという点では、どこも困難を抱えている…。あらためて連帯が必要だと思う。今日は雨、パソコンに向かう。バック・ルームのショート・プレゼンテーションは今日までなので、その後これを撤収。

９月１６日

先週はブリュッセルに行っていたので、見ることはできなかったが、土曜日はドーム広場が市場に。この街にこんなに人がいたのかというほどの賑わい。食料品と生花が主で、屋台を車に連結し運んでくるようだ。作品の配線等でお世話になったガートにばったり会う。ドイツを楽しんでね、と。彼は英語が苦手だが、一所懸命話そうとしてくれる。その後、cubaに寄り、また広場に戻ると、いくつかの屋台は車に連結され、撤収を始めている。２時過ぎには元の閑散とした広場に戻るのだが、

今回の自身のインスタレーション・ツアー（？）とダブって見えてくる。インスタレーションも市をたてるようなものなのか…。今日はまた、ミュンスターの美術館、ギャラリーが、オールナイトで無料開放されるというイベントの日だ。これがあると聞いて、ケルン行きを１日伸ばした。Landes Museum（近現代を扱うミュージアム）は、３層からなる回廊の古典建築で、中央は吹き抜け、美しい。回廊はほとんど階段室で、ピラネージの版画を思い起こさせる。下のカタログショップで物色していると、何と前出の、ピヨトル・サモイスキーのカタログがあるではないか。外で待っていたエァハートにその旨伝え、カタログのドイツ語を確認すると、９６年に別館で展覧会をやっているとのこと、エァハートも知らなかったようで、彼、カタログを購入。ピヨトルの東京（芸大）でのレクチャーの際にも、説明があったと思われるが、ここへ来てようやく繋がった感じだ。偶然いろいろなものが繋がってくる。さて明日はケルン。Moltkerei のディレクター、クリスティアンに電話する。

２．ケルン

９月１７日

昨日のオールナイトの美術館・ギャラリー開放、大都市では効果は薄いだろうが、ミュンスターの規模を考えると面白いアイディアだ。祝祭的に仕立て、メリハリをつけようという試みか。もちろんギャラリーを回る人間がいるというのが前提だが。昼前、ミュンスターを後にする。急行で１時間半とはいえ、すべての荷物を持っての移動はやはりキツイ。筋力のなさを実感。ケルンに入り、クリスティアンと駅で待ち合わせ、ピックアップしてもらう。一時、彼の家（宿）に寄り、Moltkerei のスペースに移動。スライド・プロジェクト用の写真を撮る。そうこうしているうち雨が振り出し、屋外での撮影はやむなく中止、インスタレーション全体の配置を考えるにとどまる。クリスティアンは忙しない。ひっきりなしに煙草を吸い、常に歩き回っている。彼の家に戻った後、メールが繋がるかどうか試すが、去年試したとき同様繋がらず。さてどうしたものか…。彼のパソコンからホットメールを見るが、日本語を読むシステムが入っていないため、日本語はすべて文字化けしている。インターネットカフェを探す外ないが、いずれにせよオープニングの後だ。夜１時過ぎ、ベルリンからコンポーザーの女性が到着。彼の別宅（スタジオ）に宿泊予定。来年 Moltkerei を使ってのパフォーマンス展を企画しているようだ。

９月１８日

Ｆａｘプロジェクトはケルンでも行なう予定だが、昨日確認した際もＦａｘが入らない。設定を変え試すが、どうも壊れているらしい。クリスティアン風邪気味で、なかなか起きてこず。彼を頼りにするは危険と判断し、最悪のケースに対応できるよう、全体プランを練り直す。昼 Moltkerei 近くのラボにスライドフィルムを出し、それが上がってきた後、投射の状況をテスト。Moltkerei はＬ字型の空間で、ここをどう使おうか考えていたのだが、ひとつはＬ字の奥に、例のフェンスを通してみた風景をリフレクションのように投射し、持参した作品をスクリーンに見立てるというもの。これはある程度めどがたった。２つめは、写真面を外側にしてロール状にした作品。これは日本の風景のみで、奥の作品と対照をなす。今回ケルン国際写真展にエントリーしている関係、写真の要素が強いプラン。問題はＦａｘプロジェクトとの兼ね合い。Ｌ字手前、窓に面した空間を使う予定だが、Ｆａｘの具合次第で、セッティングを変えなければいけない。７時ごろ、ライン川沿いに迂回し、徒歩で帰りながら風景サンプルを撮影。大聖堂横の、ライン川に架かる鉄道橋には、歩行者

用の側道がある。行って帰ってくるが、思いの他長く疲れた。やはり狭いミュンスターとは違う。帰ると、クリスティアンがディナーをつくって待っていてくれる。この人、ルーズなのかマメなのかよくわからない。室内は男のひとり暮しにしては、かなりきちっと整理してある。Ｆａｘに関しては、明日機械を変えてみるという事になった。食後、作品について、また日本の状況について少し話す。家やスペースの賃貸料、分譲価格の高さには皆驚く。昼ヤンス(前出)から電話があったらしく、明日寄るという。フィル同様彼も忙しい。

９月１９日

昼前、街を少し散策した後、１時過ぎヤンスが来るというので、Moltkerei に駐輪してあったクリスティアンの自転車を借り、いったん彼宅へ戻る。ヤンス、自身のパフォーマンス・ツアーで多忙のはずだが、聞くといくつかキャンセルがあり、時間が空いたとのこと。時間が空いたとはいえ、彼の家ドルトムントからケルンは結構遠い。ローカル線で２時間程度。わざわざ来てくれる。はたして再会。(昨年、ドイツ視察に来た際会っている。) いきなりだがインターネットのトラブルについて相談する、が解決せず。その後 Moltkerei に移動。彼の組織 MeX のＤＭデザインをしているクリスタも現れ、遅いランチ。その際、Ｅメールをクリスタの家から試してみたら、とヤンス。彼女了承してくれる。明日伺う事に。目玉焼きセット・ドイツスタイル（？）を食べながら、ヤンスとパドルズ今年の運営についてや、来年のことについて話す。その後、彼が見たいギャラリーがあるというので同行。道すがら、互いの作品について会話。彼の最近のテーマ、Boredom (退屈)についていろいろ聞く。彼によると、Boredom は、Border (境界)と同じ語源で、今回のわたしのテーマ、フェンスと繋がるね、と。相変わらず頭の回転の速い男だ。時たま速すぎてそそっかしいところがあるが、ご愛嬌。クリスチャンが別のＦａｘマシンをアレンジ、テスト成功、ほっとする。夕食時、前出のコンポーザー、アナ・マリア他、クリスティアンが友人を招いている。毎夜、２時ごろまで続くのだが、彼はいつもこうなのだろうか…。みんな英語で話そうよと言って、気を使ってくれる。が、アルコールが入ってくると、やはりドイツ語が多くなり…。これはどこの国でも一緒だろう。

９月２０日

昼、今日ベルリンに戻らなければいけないというアナ・マリアが、Moltkerei に寄ってくれる。彼女はアルゼンチン出身のコンポーザーだが、ビジュアルアートを見るのも好きという。作品は気に入ってもらえた。Moltkerei はギャラリーでなく、異なるジャンルが交錯する仕事場(Werkstatt)だとクリスティアンも言っていたが、実際そう機能しているのだろう。夕方、概ね作品のセッティングが終わる。あとはＦａｘ待ちだが、どうも機械の相性があるようで、後続まったく入らず。最低限の量で調整できるかたちを模索、何とかなるだろう。目処がたったところで、前出のクリスタに電話、Ｅメール・アクセスを試すため家を教えてもらう。クリスティアンに、通り名が細かく入った地図を借りていたので、何とかたどり着く。外国人が日本で、込み入ったところに地図を頼りにたどり着くのは至難の技だが、こちらのストリート表記はありがたい。ケーブルを借り、いくつかのアクセス番号を試すうち、１つに成功。やったぁーと、子供のように叫ぶ。これにより、自身のＰＣでメール・アクセス可能。クリスタは学生時代、ヤンスの企画する展覧会のカタログ・デザインを手がけ、それ以来ボランティアで、彼の広報物のデザインをしているという。今は売れっ子デザイナーになってきたようだが、きっかけは、ヤンス関係の仕事を見た人から、仕事が入りだし…ということで、持ちつ持たれつの関係があるよう。いい関係だ。夜、１０月に東京・ギャラリー・

サージに来る、モニカ・フォン・ヴィードルとクリスティアン宅で食事。彼女は、主要ギャラリーでのキャリアもあり、気品漂う感じの女性。細長い洋犬を連れている。クリスティアンも、彼女の前だと犬のようになってしまう…失礼。とっさに、ギャラリー・サージ近くの居酒屋に彼女がいるところを想像してみるが…大丈夫なのか…失礼。

９月２１日

昨夜モニカから、東京でのプランについて聞く。パドルズ・フライヤー掲載の彼女の作品は、バッハの楽譜から展開したもの。「バッハ」は、ドイツ語で「小川」を意味し、今回も「小川」から「河」－「海」－「雲」…と大気の循環を作品にすることを考えているという。もちろん「水溜り」(Puddle)も入っている。ちょっと待ってほしい…。これはまさに、わたしがこの交換展企画名、Puddles(パドルズ)を命名した際に考えていた比喩ではないか…。クリスティアンに、昨年のパドルズ・カタログ中のわたしの文章を、ドイツ語にしてもらう。(モニカは英語が苦手。)彼女、このことは知らなかったようで、偶然の一致に一同驚く。さて今日はオープニング。昨日から雨が降り続いており、少し心配に。昼、作品セッティングの最終チェックを終え、外へ出ると雨は上がってい、ほっとする。オープニングの感じは、ミュンスター、cuba の時とは違い、特にスピーチをするということはなく、いわゆる一般的なギャラリーのオープニング。だた、出すものはドリンクのみ。(これはミュンスターでもそうだった。)ケルン日本文化会館、館長の坂戸さんに来てもらう。坂戸さんにはパドルズについて、後日クリスティアンと共に説明に行く予定。この時期のケルン、アートフェアが目白押しで、オープニングも各地で分散しており、その割には人が来たのではないかとクリスティアン。５、６０人ぐらいが、入れ替わり立ち代りという感じだったろうか。坂戸さんが一人できてくれたことと、ひとり大物のクリティックがきたことに、クリスティアンはご機嫌だった。終盤、新聞記者が来、パドルズと作品について、３０分ほどインタヴュー。とにかく展覧会は始まった。

９月２２日

オープニング後少し気が抜け、昼まで寝てしまう。それでもクリスティアンより起床が早い。彼も１０月、シンポジウムで東京に来るのだが、この生活リズムだとジェット・ラグがキツイだろう。(ちなみにドイツは日本から７時間遅れ。)Moltkerei オープン時間は３時－６時の３時間。結構あっという間だ。スイス出身の女性が、プロジェクトスペースを探していると言って訪ねてくる。クリスチャン、彼女に Moltkerei の資料を見せた後、外出。間が持たないので、彼女にパドルズの説明をする。すると何と、マルレーン(注：パドルズで、７月に東京・ギャラリー・サージに来たオランダ人アーティスト)を知っていると言うではないか。狭すぎる…。彼女結構粘り、結局６時までいる。その後クリスチャン戻り、３人でいくつか他のオープニングに出かける。夕食後、クリスチャンも参加する、東京シンポジウムの話になる。彼、言葉の意味付けには、結構こだわりを示す。先日も、Moltkerei のことをギャラリーと言ったところ、Moltkerei はギャラリーではないと、にわかに否定。彼の中では、ギャラリーは作品を売るところという認識があるようで、Moltkerei はプロジェクトスペース、ワークスペースだ、と。また今夜、オルタナティヴという言葉を使うと、その言葉は嫌いだと返ってくる。Moltkerei は、何かと闘おうとしているわけではなく、すべてのギャラリー・美術館に先んじて、実験的で良質のアート・プロジェクトを行う場所だと。それはアートの外(オルタナティヴ)ではなく、あくまでも内側なのだと強調する。このことは、もっと話し合わなければいけないね、と言い就寝。

９月２３日

Moltkerei 土曜日オープンは、１時－３時。前出のケルン国際写真展(フォトキナ)のカタログを手に、ぱらぱらと人が来る。ケルンは写真のメッカ。このカタログを持っている人を、街のあちこちで見かける。作品写真を撮ろうと思ったが、人がいたためタイミングを逃す。またケルンは今、plan 2000 という建築のイベントが各地で行われており、夕方このうち、公共空間を使ったインスタレーションのオープニングに、クリスティアンと出かける。以前 Moltkerei で発表した作家だという。その後、フォトキナのミーティング・ポイント(総合案内所のようなもの)に行き、オーガナイザーと話す。やはり悩みは何処も同じ、運営資金のことで、特に、公共機関からの助成と一般企業からの協賛のバランスが難しいらしい。いつものごとく、日本の状況との比較になる。パドルズの話も出す。一方通行ではなく、相互交換というアイディアがいいねと、オーガナイザー氏。話しているうち、明日、ガイド付きの見学ツアーがあるから来ないか、という事になる。タバコの JTI が主なスポンサーで、派手なイラストを施したリムジンで展示サイトをまわるのだそうだ。リムジン…なんだそれ？ガイドは、ドイツ写真が、日本の２、３０年代の写真に与えた影響を研究している人らしい。彼と会ったらいいのではと、オーガナイザー氏。彼は日本にいたので、日本語も話せるのではないかとのこと。面白そうなので話に乗る。夜、クリスティアン宅には、例によっていろいろな人が入れ替わり立ち代り現れる。電話もひっきりなしに掛かり…。忙しい。

９月２４日

フォトキナのギャラリー見学ツアー、ミーティング・ポイントに 11 時に行かなければいけないのだが、クリスティアンの生活リズムが、こちらに移ってきていて、やっとの思いで起きて行く。昨日のオーガナイザーに、今日のガイド、フェルディナンを紹介してもらう。確かに日本語を少し話すが、英語のほうが意思の疎通は楽だろう。さて時間となったが、他にツアー希望の人間がいるようにも見えない。一人女性を紹介されたが、関係者らしい感じ。結局この女性、フェルディナン、伊藤の３人でリムジンに乗りこむことに。この人数なので、当然見学サイトは伊藤の意思にゆだねられる。フォトキナでは、東京１００年という企画展が組まれており、日本写真の研究者フェルディナンは、そのために呼ばれたと思われるが、ここまで来て東京の写真を見ようと思わなかったので、ベルリンの若い写真家グループ・ショウ他を選択。サイトに向かう。フェルディナンも初めてらしいが、リムジンなるものに初めて乗る。車内は片面がソファー状になっており、対面にバー・カウンター。もちろん日本でも見ないが、ドイツでも珍しいらしく通行人が皆見ていく。フェルディナンの研究対象である、２、３０年代の文化状況には私も興味がある。車内では、これについて聞く。また現在の日本の写真についても話したが、彼はいわゆる写真のギャラリーしか知らないという。彼の言うコンセプチャル・フォトについても知りたいようで、ギャラリー・サージや秋山画廊を紹介しておく。ベルリンの若い写真家グループ・ショウは、なかなかおもしろかった。フェルディナンには Moltkerei にも来てもらうよう話をつける。夜、クリスティアンのスタジオに滞在しているアーティストと共に、ドイツ料理のレストランに行く。ザウアーブラーテン(牛肉の赤ワイン煮こみ)を取る。

９月２５日

クリスティアンのスタジオに滞在しているアーティスト(スイス・バーゼルの美術アカデミーで教え

ているという。)には、昨日、地下鉄駅で行われたパフォーマンス会場でばったり会った。このパフォーマンスは、地下通路に芝生を敷き詰め、片側面に水を張り水路状にしてある中、アンジー・ヒーゼル他、礼服姿の３人のパフォーマーが、水路の中をゆっくり後転しながら進み、最後に階段入口で、自ら滑車で逆さ吊りになるというものだ。場の意味の変換…内と外、地上と地下、昇降…「通行」の意味を考えさせるものなのか…少しピナ・バウシュを連想させもした。しかし３時間もよくあんなことをやっているものだと、そのエネルギーには驚く。また日本と違い、地下鉄が民間企業のものとはいえ、よくこんなプロジェクトを通すものだと…。すべてにタフでないとやっていけないようだ。今日は作品の撮影テストに終始。その後しばらく、美術のことを頭からはずし、街を自転車で…。(ここでも自転車だ。)ケルンはゴシックの大聖堂で有名だが、美しい外観を持つロマネスク教会もまた点在している。市街が大戦でほとんど壊滅したため大概は再建。内部に入ると、残念ながらほとんど新しい。戦前の写真を見ると、天蓋にはモザイクが施されていたようではないか。連合軍、大聖堂は標的から外したが、ロマネスクの美には疎かったのだろうか…。パドルズも、大聖堂ではなく、点在するロマネスクのようなもの…いけない。美術のことを頭からはずそうとしていたのだった…。

９月２６日

ロマネスク建築、クリスティアンによると結構数があるよう。気になるので、ツーリスト・インフォメーションでガイドブックを探す。ケルンには日本語版があったが、英語、スペイン語版に比べると薄い。インフォメーションのお姉さんも、英語版のほうが良いのでは？と言う。安いので両方購入(合わせて２５０円程度)。Moltkerei で双方比べてみると、やはり日本語版は意味をなさない。おまけに、地図の番号と場所名がまったく違っており、比べてチェックしてつくづく良かったと思う。調べるとやはり、ロマネスク建築結構ある。しかし大抵の教会のオープン、午後は Moltkerei の時間と重なる。作品が作品なだけに、誰かが倒すのではないか(私の作品は倒れやすい、実はクリスティアンがよく倒す)と思うと、Moltkerei にいたほうが…とも思うが、やはり見てみたい。ガイドブック内容を吟味し、見所を絞る。ということで今日は、作品撮影続きと、ガイドブックのチェックに終始。英語版なので少々時間がかかり…。うーん、語学が堪能なら、どれほど時間を有効に使えるだろうか。このところ、日本、オランダ開催パドルズのほうも準備佳境に入ってきており、メールのやり取りも複雑に。このときばかりは、異国情緒も消える。メールチェックでケーブルを借りているクリスタが、独り言を言いながらキーボードをたたいている私を、憐憫の表情をもって見ている…。

９月２７日

昼、クリスティアンと共にケルン日本文化会館に行き、パドルズの考え方についてや Moltkerei の状況、次年度プログラム作成経過などを簡単に説明、その後寿司をご馳走になる。クリスティアン、以前サンフランシスコで寿司を試したことがあるらしく、それがひどかったため少し慎重になるらしい。しかし、刺身が駄目という訳ではなく、おいしかったと言っていた。箸もそれなりに使いこなしている。日本でもぜひ食べさせなければ。面会した館長の坂戸さん、基本的には古典芸能を見ている方のようだが、近代以降のものでは、２、３０年代の日本のアバンギャルドや、具体ムーヴメントの展覧会が印象に残ったと言っていらした。まあ、その時代に簡単に認められても歴史に残らないのでは？とも。ごもっとも…。要点を押さえた指摘に、懐の広さを感じた。クリスティアン

もその辺は動物的に感じているらしい。その後、前日調べたロマネスク建築をいくつか自転車で…。展覧会のほうはオープニング後、客足途絶える。ニューヨークの５５マーサー・ギャラリーでの個展の際もそうだったが、アメリカ・ヨーロッパは基本的には、初日と最終日しか人は来ないようで。クリスティアンも、早く新聞に載らないかと、毎日チェックしてくれる。

９月２８日

Moltkerei の展示、ようやく新聞記事になる。取材からちょうど１週間後。先述したが、この時期ケルンはアート・フェアが目白押しで、記事もたとえば、フォトキナ関連で複数のギャラリーがまとめて書かれているといった扱い。今回写真こそなかったが、単独の項目で記事になったのは良しとしていいのではと、クリスティアン。例によって英訳してもらう。パドルズの名の由来と自身の作品の制作意図は、正確に書かれていたのでほっとする。何とか、パドルズのスポークス・マン役は果たせただろうか。パドルズの名の由来といえば余談だが、ドイツ人が「Puddles」を発音すると、「プードルズ」になり、犬のプードルと同じなのだそうだ。なぜプロジェクト名が、犬のプードルなのかと真顔で聞いてきた人がいた。夕食時その話題になった際、クリスティアンが英独辞典を引きだし、綴りがぜんぜん違うと確認していたが。しかし、アーティスト同士バタバタしながらやっている様は、犬のプードルに近いのかと思ったりもする…。頑張らなければ。夜は再び、シンポジウム内容の話から、クリスティアンの芸術に対する考え、私のドイツでの思考、エアハートとの対話のこと、新たな企画の可能性などを２人で話す。朝になってしまった…。詳細は明日。

９月２９日

やはりドイツでも、社会と芸術あるいは、芸術の社会性といった議論はあるようで、クリスティアンのスタンスとしては、芸術を他のものの道具として使うような意味での社会性は好まないと言う。芸術は、芸術として社会に対峙するべきだ、と。そこは自由な空間であり、何物にも束縛されるべきではないと。運営資金獲得に関しても、見返りを考えなければいけないような関係を、注意深く避けてきたと言う。また、わかりやすいものを大々的に広報すれば、人も資金も集まるだろうが、そもそも多くの人間が芸術を理解するとも思えないので、やはり最低限の資金で、あるレベルを保った活動を続けたいとも言っていた。当たり前だが同じドイツとはいえ、さまざまな活動形態(ストラクチャー)があるようだ。先の cuba、エァハートのスタンスとは違う。エァハートはスペースの運営に関しては、cuba が複合的な市民センターの中にあるため、否応なく政治的にならざるを得ないよう。自身のアーティストとしての活動とのあいだにジレンマを感じているようだった。一方クリスティアンは、彼のアーティストとしての活動とスペース運営は、完全に切り離して考えているようだ。彼は１度も Moltkerei で発表をしていないと言うし、Moltkerei の活動資金を自らの生活の糧にしているわけではないと言う。エァハート、クリスティアンと議論を重ねていくと、一概に日本とドイツは…といった話ではなくなってくる。やはり問われるのは、「個人」なのだろう。パドルズはその上での連帯なのだから…。

９月３０日

聞くと土曜の昼過ぎから日曜は、店がすべて閉ってしまうらしい、知らなかった。みやげ物などは、作品撤収が終了してから考えようと思っていたのだが…。土曜日はケルンでも市が。分散しているようなので、１ヶ所の規模はそれほど大きくない。水溜りのように？…。３時過ぎ作品撤収。その

後モニカ(前出)のスタジオに。彼女の、東京ギャラリーサージでのインスタレーションについて、実現可能かどうかクリスティアンも交え検討。モニカとクリスティアンの議論はドイツ語なのだが、どうも互いに意見を曲げないよう。時間がかかる。いずれにせよ今度はこちらがホストだ。できるだけのことはしたいと思う。パドルズの組織間のアーティスト交換というアイディアは、いたってシンプルだが、実際行っているプログラムを、私はパドルズ以外には知らない。そうとはいえ、もちろん簡単に相互通行になるものではないが。今回の滞在で、エァハート、クリスティアンと完全に理解し合えたとは言いきれないが、互いに響き合う点は見つけたはずだ。日本とドイツでは車の通りが左右逆であり、不慣れなものには通行困難であっても、自転車であれは融通が利く。今回移動はほとんど自転車だったのだが、パドルズも自転車走行のように、あるときは大通りを迂回しながら、あるときは反対車線を走りながらコミュニケーションのリンクを張ってゆくようなものなのか…。また、偶然人と人が繋がってくるという経験を今回多くした。他者に対して興味を持ちつづけること…。あたりまえだが、それなしでリンクなどありえないのだから。ー完